



# 常勝のワンチームを作る8つのステップ vol.28

大切なのは規模や形式の大小ではなく、そこが意味や価値を見出せる「場」であるかどうかです。そうした「場」をつくるという意味合いもあって、私は小学生ラグビーの全国大会である「ヒーローズカップ」を運営しています。子どもの頃、一度でも感性から力が湧き上がる経験をしたことがあるかないかで、その後の人生の鮮やかさは、大きく変わります。「三つ子の魂百まで」といわれるように、幼少期の体験がその後の人生の礎となるのです。

子育て中のお父さんやお母さんは、子どもの周りにそうした「場」がなければ、それを見つけられるような環境を探し、そこに子どもを放り込んでやる必要があります。

本来、子どもは現在に浸りきって生きているもの

です。泣いているときは「泣き」の真ただ中であって、ひたすら泣いていますが、お菓子をあげたり、おもちゃを渡したりと、何かのきっかけがあれば、「泣き」をぱっさりと切って、笑顔になります。まさに「前後際断」であり、過去にとらわれることなく現在を生きているのが子どもなのです。

その子どももいつかは大人になり、その過程で体も心も成長していきます。しかし感性だけは、子どもの頃のままで変わらずにいたほうが良い部分もあります。

1980年代にラグビーのフランス代表キャプテンを務めたジャン・ピエール・リーブ氏は、以下のよう有名な言葉を残しています。

「ラグビーは少年をいち早く大人に育て、大人に永

## 力が湧き上がる体験をする「場」の重要性②

文 林 敏之  
text by Toshiyuki Hayashi



遠に少年の魂を抱かせるスポーツだ」。

ラグビーは、そんなスポーツなのですが、感性の魂のようだった子どもも、大人になるにつれて頭に種々雑多な情報が入り込み、その結果、感性ではなく理性で行動するようになってしまいます。

すると感性は弱まり、目から輝きが消えていきます…。

この目の輝きは、生きる力を表しています。目から輝きが消えれば、生きる力だって失われていくの

です。

ドキドキしたりワクワクしたりする感性を失えば、生きることに対して鈍感になります。つまり、「私」が鈍くなっていくのです。

人間がどう生きたかは、何に対して、どのようときめいたかで決まるといっても過言ではありません。そうした意味でも、先述のリーブ氏の言葉は含蓄のあるものと思えます。

### Profile

1960年徳島生まれ。13歳よりラグビーを始める。日本代表を13年間務め、神戸製鋼では7連覇を達成。同志社、神戸製鋼、日本代表、第1回RWCではキャプテンを務めた。オックスフォードブルー、歴代ベスト15に入る。引退後はラグビーで体験した湧き上がる感動を伝えようと、教育の道を志し、感性教育をテーマに活動している。2006年にNPO法人ヒーローズ設立、理事長就任。



『常勝のワンチームを作る8つのステップ』  
林敏之  
発行：白秋社  
定価：1870円（税込）